

遠藤隆次\*・橋本 亘\*\*：北海道常呂郡訓子府町大谷沢に露出する石灰岩より *Pycnoporidium* の発見

表題の地域の地質は、最近の石灰岩調査(土居繁雄, 1952)が行われるまで、殆どその状況が知られず、僅かに岡村要蔵(1914)が“古生層”の分布を図示したに止まる。しかし、この東方の<sup>サラキツ ユナイ</sup>更吉朱内村(今の北見市開盛<sup>カイセイ</sup>付近)の一農家から大石三郎の貰い受けた石灰岩に *Chaetetes* のあることが、杉山敏郎(1941)により報ぜられて以来、付近の石灰岩は興味をよんでいた。かねてより北海道中生界の堆積基盤について調査を進めて来た筆者の一人橋本にとっては特に興味のあるところで、幸い文部省科研費を得て、この地方に旅行し、表題の化石を得て遠藤とともにこれを調べ、ここに報告するものである。

土居繁雄によれば、石灰岩鉱床は厚い輝緑凝灰岩層の間に介在し、多少の薄いチャートのレンズを伴う。その輝緑凝灰岩層は厚いチャート層と互層する。走向は、ほぼ、大谷沢の流路に平行し、大体 NE-SW で南東に約 25° の単斜で、大谷沢から南東約 1½ km の処に向斜軸部があると解された。鉱体は約 2km の間に大小 6 個のレンズとして認められている。

表題の化石の得られたのは土居の第 4 鉱体の風化部からで、他の鉱体のものからは、殆ど、鑑定に耐える化石を発見できなかつた。

付近の地質構造は、浦島幸世(1956)のマンガン鉱調査報告を見ると、果して、土居の図示したほど簡単

かどうか、なお精しく見直す必要のあることを思わせるが、兎も角も、石灰岩は、沢の方向にそつて分布している。

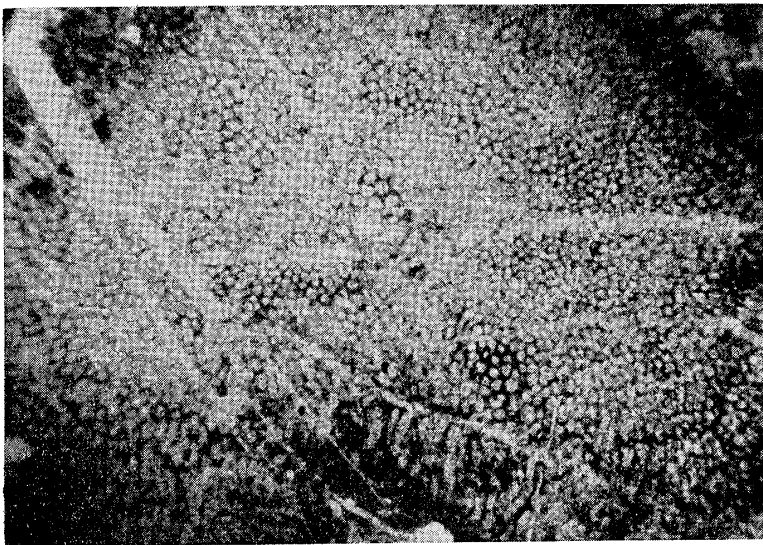
化石藻を含む石灰岩は多少歪角礫質状のもので、一見、*Inoceramus* の稜柱層を思わせる、1~2mm の数枚の layers を伴う。

化石藻は付図に示したように、小さな塊状をなすもので直径は 5mm に達するであろう。Filaments は丸味をもつた多角形の断面を呈し、細・太、様々であるが、大体 0.05mm 前後で、太いのは 0.09mm に達し、細いのは 0.025mm ほどのものもある。Filaments の長さは、生憎くと良い縦断面がないので、充分ではないが、0.3mm には達するであろう。Partition は余り明瞭ではないが 0.05~0.07mm 位、或いは 0.1mm に達するような間隔で存在するようである。

この性質は矢部長克・外山四郎(1928)が鳥の巢石灰岩から記載した *Pycnoporidium lobatum* YABE et TOYAMA のそれに一致する。

北海道における此種の石灰藻は、既に橋本(1936)が記したように、空知層群から由来したと思われる礫や、*Orbitolina* 石灰岩の双方に発見されている。また、矢部長克・杉山敏郎(1939)は胆振国占冠中央のペペシユル川の空知層群から発見している。

この化石の発見と、岩相とから考えると、かねて橋本(1952)が推測していたように、この石灰岩を含む地層は、恐らく中軸地帯の空知層群に対比されると思われる。しかも、恐らくは、その下部の、山部層(橋本亘, 1958a; 1958b)に対比されることであろう。



*Pycnoporidium lobatum* YABE et TOYAMA  
×20

東京教育大 Reg. No. 6250

地質学雑誌 第 65 卷 第 765 号 1959 年 6 月  
\* 埼玉大学 \*\* 東京教育大学

#### 文 献

- 土居繁雄(1952): 北見国訓子府村大谷附近の石灰岩, 道地源, 北海道地下資源調査報告, 6, pp. 5~11.  
橋本 亘(1936): 石狩国空知郡富良野盆地西部山地の地質, 地質雑, XLIII, pp. 493~530.  
———(1952): 北海道侏羅系の地質, 地調報告, 特別号(B).

- (1958 b): 地質, 1/20 万北海道地質図説  
明書, pp. 1~26.
- (1958 b): 蝦夷~樺太地向斜地域.
- 岡村要蔵 (1914): 北海道網走屈斜路地方地質調査  
報文, 北海道鉱調, 20.
- 杉山敏郎 (1941): 日高系中の含蘚虫類石灰岩の地  
質時代に就て, 地質雑, XLVIII. pp.189~195.
- 浦島幸世・堤 秀造 (1956): 訓子府日の出マンガ

ン鉱山の鉱床調査報告, 開発庁, 北海道地下資源  
調査資料. 29, p. 12.

矢部長克・杉山敏郎 (1941): 神居古潭系中の化石,  
地質雑, XLVIII, pp. 340~341.

YABE, H. & S. TOYAMA. (1928): On Some  
Rock-forming Algae from the Younger  
Mesozoic of Japan. Sci. Rep. Tohoku Imp.  
Univ., Ser. II. XII, pp. 141~152.

## 雑

## 報

## 高橋英太郎\*: 宇部岬砂礫層の時代

宇部炭田の東部, 宇部岬北方には夾炭層を被つて吉  
南層群<sup>り</sup>とよんだ洪積層が拡がっているが, これを被  
つて所々に厚さ 1m 以内の砂礫層があり, これを宇部  
岬砂礫層とよぶこととする. この砂礫層の特徴は礫と  
してかなり多量の石炭を有することである. 地層は丘  
陵頂を水平に被つており, その下は不整合面をへだて  
て洪積層の赤土層である. 宇部岬北方丘陵の五十匁山  
(海拔 22m 位) では厚さ 0.7m で砂礫層中の礫は石  
炭の外に石英・チャート・ホルンフェルス化した粘板  
岩, これに夾炭層からと思える砂岩が混る. 山口大学  
工学部南の梶返の石原アパート付近 (海拔 25m 位)  
では厚さ 0.5m で礫は石炭の外に蛇紋岩が入る. 礫の  
石炭は角礫・亜角礫・他はかなり丸みを帯びている. 又  
両地とも砂礫層中には下位の赤土層から 2 次的に運ば  
れたと考えられる赤土礫が入っており, 時に赤土が薄  
い層をなすこともある. 地層は梶返では余り硬くない  
が, 五十匁山では硬くて, ハンマーを用いなくては礫  
はとれない. このような性質があるので当初, 洪積層  
のうちに入れたい気持でいたところ, 最近, 五十匁山  
で, 砂礫層の最下位即ち洪積層の赤土層との境の不整  
合面より驚いたことに白磁器片を幾つか掘り出した.  
白磁器は砂礫中をハンマーで割つてとり出したのでそ  
の産状は間違いのない. この白磁器には青色のゴスの模  
様が少しかかれてある. こうなるとこの硬い砂礫層は

洪積層どころか沖積層中でもごく近世のものというこ  
とになつてくる.

石炭礫が入っていることと, 白磁器片が出てくるこ  
とからこれはどうしても江戸時代以降宇部炭田開発期  
に入つてからのもので, 恐らく当時のボタ山の崩土が  
流れ出して低地に堆積したものと見るより他ないので  
あるが, そうなると, 現在付近の平野より数m高い丘  
陵頂にあつて, 丘陵端に地層の断面を見せているとあ  
つては, 近世におけるごく短い時間の間にかなり侵  
蝕をうけたものと思われる. この侵蝕は単に砂礫層の  
みならず下位の洪積層をも一緒にえぐつて数m下刻し  
ている. この侵蝕の速度の大きいのに驚き, 付近の現  
凹凸地形が余り遠くない時代からのごく僅かな時間で  
形成されたものであることを知つた.

はなはだ新しい地形がいかにも古くて地質時代のも  
ののような様相を呈することと, かなりの時代を経て  
はじめてでき上つたと思われる凹凸ある地形が, ごく  
近い時代以後に作られたという 2 点を報告しておく.

\* 山口大学文理学部地学教室  
地質学雑誌, 第 65 卷, 第 765 号, 1959 年 6 月

## 引用文献

- 1) 高橋英太郎・河野通弘・長尾 恵・大浜勉夫  
(1958): 宇部地区の洪積層 (山口大学教育学部  
論叢, 7, (2), 115).